植生史研究　第5号　p. 39－47　1990年1月　Jpn. J. Histor. Bot.

# 小椋純一*：京都近郊山地の植生史
# ― 絵図による近世の植生復元を中心にして

# Junichi OGURA*：History of the Vegetation of the Mountainous Area nearby Kyoto — Studies of the Vegetation in the Edo Period through Pictures

## 1. 京都盆地における植生史研究の概略

今日，広く森林に覆われている京都近郊山地の植生が，人間のかかわりによってどのように移り変わってきたかを主に考える立場から，本稿において「京都近郊山地の植生史」との表題を掲げ，特にその近世の植生景観についての考察の紹介を中心に述べるが，その前に，京都盆地での植生史に関する研究の概略について少し触れておきたい。

最終氷期から現在に至る京都盆地とその周辺山地の連続した植生を考える上で，深泥池での2件の花粉分析（深泥池団体研究グループ，1976；中堀，1981）は特に貴重である。それらの考察によると，深泥池周辺の植生は，最終氷期には針葉樹林であったが，時代が下り気候が温暖化し，現在の気候に近づくにつれて，落葉広葉樹林から照葉樹林へと変わり，その後人為的影響によって，アカマツやスギの多い植生に変わっていったものと考えられる。アカマツが増えはじめ，またそれが優占する時期は必ずしも明らかではないが，深泥池団体研究グループの考察によると，アカマツが増えはじめたのは今から2,000年以上前，アカマツが優占してきたのは1,500年ほど前である可能性が考えられている。

また，遺跡などから出土する様々な植物遺体は，各時代における具体的な植生を明らかにするが，京都大学構内遺跡においては，花粉分析による連続した植生の変遷（中堀，1978）とともに，種子や埋木などの植物遺体の調査（京都大学埋蔵文化財センター，1985）により，その地の縄文時代の詳細な古植生が明らかになっている。

一方，文献や絵図からの考察としては，日記類等の古典文学に登場するキノコの種類から，過去の京都近郊山地の林相を明らかにしようとした試み（千葉，1973）や，次章で紹介する筆者の考察（小椋，1983, 1986, 1989a）がある。

明治以降については，地形図や写真などのよい資料も多く，この間の植生の変化は比較的捉えやすい（小椋，1981, 1988, 1989b）。この間，アカマツ林が大きく減少してきた一方，スギやヒノ

*〒606　京都市左京区岩倉木野町137　京都精華大学
Kyoto Seika University, Kino-cho, Iwakura, Sakyo-ku, Kyoto 606, Japan.

キの人工林が大幅に増加し，近年では社寺裏山を中心にした照葉樹林の拡大も顕著である。また，この間，竹林の消長も特に大きなものがあった。

## 2. 絵図の考察からみた近世の京都近郊山地の植生景観

京都は近世においても文化の中心であったため，当時その付近を描いた絵図も数多く作られ，今日まで残されているものも多い。それらの中には，かつての京都近郊山地の植生を考える上で，資料的価値が高いものもある。ここに紹介するのは，これまでに筆者が検討した「花洛名所図会」(小椋，1983)，「帝都雅景一覧」(小椋，1989a)，「洛外図」(小椋，1986)についての概略である。なお図1〜5は小椋(1983)，図6〜14は小椋(1989a)，図15〜21は小椋(1986)からの引用である。

### 1) 「花洛名所図会」からの考察

元治元年(1864)に刊行された「花洛名所図会」は，平塚飄斎の草稿をもとに，木村明啓と川喜多真彦が分担執筆し，小沢華岳，井上左水，松川半山，梅川東居らが挿画を描いている。当初は，洛陽の部，東山の部，北山の部，西山の部など6篇が予定されていたが，実際に刊行されたのは第2篇の東山の部のみであった。そのため，「花洛名所図会」の描写は，ほとんど東山方面に限られる。

その挿図の描写がかなり綿密であることは一見してわかるが，同図会中の東山名所図会序には『……安永のむかし，秋里某があらはした都名所図会の，絵のようの，事そぎすぐして，しちに似ぬが，おほかるをうれへ，音羽山の，おとに聞ごえたるすみがきの上手に，かき改めさせ……』と，また例言には『……其本原たる都名所の沿革異同あるのみならず，図作の粗漏之を他邦に比すれば恥づる事多し。余是を慨歎するの余り……』とあるように，挿図の写実性が意図的に高められようとしていたことがわかる。一方，同じ例言の中には『絵図は其地に画者を招きて真を写すといへども，斜直横肆位置を立つるの遠近に随ふて違ふ所無きことを得ず……』と，多少の不正確さのあることも断っている。

ただ，このことだけで「花洛名所図会」の挿図が，極めて正確に描かれていると言うことができないことは言うまでもない。その挿画が，過去の京都周辺山地の植生を考える上で，有効な資料となりうるか否かは，何らかの方法によって検証される必要がある。

「花洛名所図会」は，他の名所図会と同様に，名所を中心とした数多くの挿図から成っている。また，その対象が京都の東山方面に限られているため，異なる挿図に同一の社寺や山が描かれていることも多い。その上，その最初の挿図には，見開きで6ページにわたって，東山の山並みを背景として，主に鴨川以東の景観を細かに描いた東山全図(図1)があるが，そこにはその他の挿図と共通した場所が広く描かれている。このように，「花洛名所図会」の場合，同一の場所を異なる視点から描いた挿図が数多くあるため、それらを互いに比較検討することにより，東山の植生

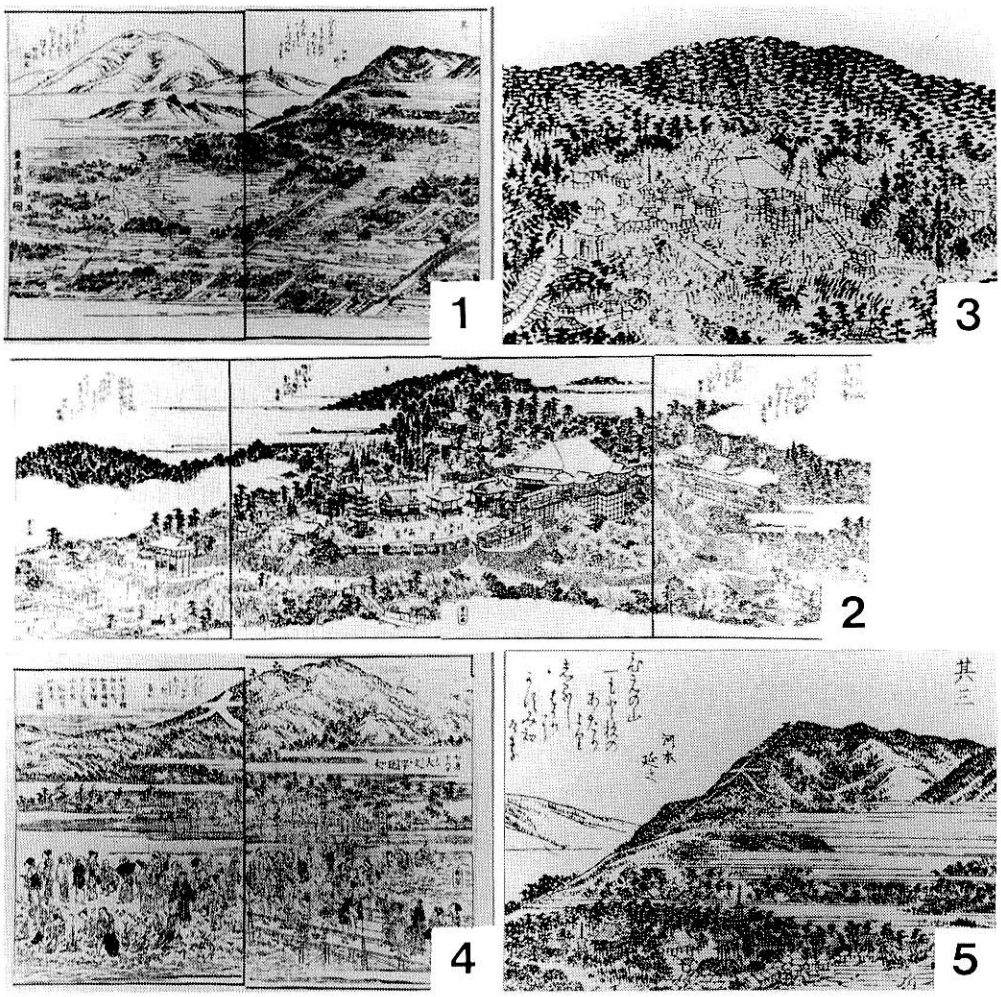


図1　花洛名所図会（東山全図・其三）
図2　花洛名所図会（清水寺）
図3　花洛名所図会（東山全図・清水寺付近）
図4　花洛名所図会（大文字送火）
図5　花洛名所図会（東山全図・大文字山付近）

に関するその資料性を考えることができる。

そのような比較検討の例として，清水寺（図2，3）と大文字山（図4，5）を示すが，これらの比較でわかるように，各挿図の植生景観は，同一の場所を描いた別の挿図のそれと矛盾する点は少なく，概してよく似ていることがわかる。ただ，絵図の性格上，東山全図のように広い地域を描いた図には，必ずある程度の省略があり，樹木の位置関係も多少実際とは異なる場合があることは，そのような比較検討からも明らかになるところである。また，挿図の画者によっては，山地の植生を十分写実的に描いていない可能性があると思われる場合も若干ある。しかし，「花洛名

所図会」の同一の場所を描いた挿図には，植生に関して，概して矛盾点が少なく，このことにより，「花洛名所図会」が江戸後期の東山の植生を考える上で重要な資料になるものと考えられる。

「花洛名所図会」から考えられる，明治に近い江戸後期の東山の植生はおおよそ次のとおりである。北は比叡山から，南は稲荷山に至る東山の当時の植生は，場所によってかなり異なっていた。東山の北部，比叡山から大文字山を通り大日山に至る山々には，大きな樹木は少なく，おそらく柴草の採取に利用されていたと思われる低い植生が広く見られた。しかし，その一部には，中木ないしは高木の孤立木や林も存在した。それらの樹木は主に松（おそらくはアカマツと考えられる）であった。一方，大日山より南，華頂山から阿弥陀ケ峰にかけての山地には，よい松林がほとんどとぎれることなく続いていた。また，それより南の山々には，よい松林の見られる所もあったが，低い植生の柴草山と思われる所も多かった。このように，山地の高木は主に松であったが，山麓の社寺などの周辺には，杉や桜や楓なども含んだより豊かな林相がしばしば見られた。また，山麓には，川添いなどと同様，竹林もよく見られた。

2) 「帝都雅景一覧」からの考察

「帝都雅景一覧」は，前編（東山之部，西山之部）と後編（南山之部，北山之部）の2編，4巻から成る。その刊行年は，前編が文化6年（1809），後編が文化13年（1816）であり，図は文化年間における京都周辺の景観を描いたものと考えられる。図はすべて岸派の代表的画家の一人である河村文鳳によるものである。そのため，図には写実主義的側面を見ることができる一方，独自の奔放な画風がよく現われている。「帝都雅景一覧」は，一連の名所図会の一つとしてとらえられるものであり，そこには全部で84ケ所の風景が描かれており，そのうち30以上の図には，背景として京都周辺の山地が大なり小なり描かれている。

「帝都雅景一覧」の場合，先に取り上げた「花洛名所図会」とは異なり，同一の場所を異なる視点から描いた挿図は少ない。また，図の背景の山地の植生がほとんど描かれていないものや，その描写が部分的なものもある。そのため，挿図の比較検討により樹種や植生高を考えることはできない。ただ，「帝都雅景一覧」の挿図の植生描写の特徴として，しばしば山地に小さな孤立林が描かれており，そのような孤立林が実際に存在したか否か，あるいは孤立林とその周辺の植生高がどの程度のものだったかは，その挿図の描写とそれと同一視点から見た現況および地形図をもとにして予測した同一視点から見た山地の形状との比較によってかなり明らかになるものと考えられる。

たとえば，泉涌寺の裏山（図6）や山嘴（山端）から見える高野川の対岸の山地（図7）にも，小さな孤立林が複数描かれている。一方，それらの図と同一視点から見た現況（図8，9）と，地形図をもとにして予測した同一視点から見た山地の輪郭の形状（図10，11）は，「帝都雅景一覧」の挿図から孤立林を除いたときの形状とよく似ている。これは，孤立林が描かれた他の挿図でも

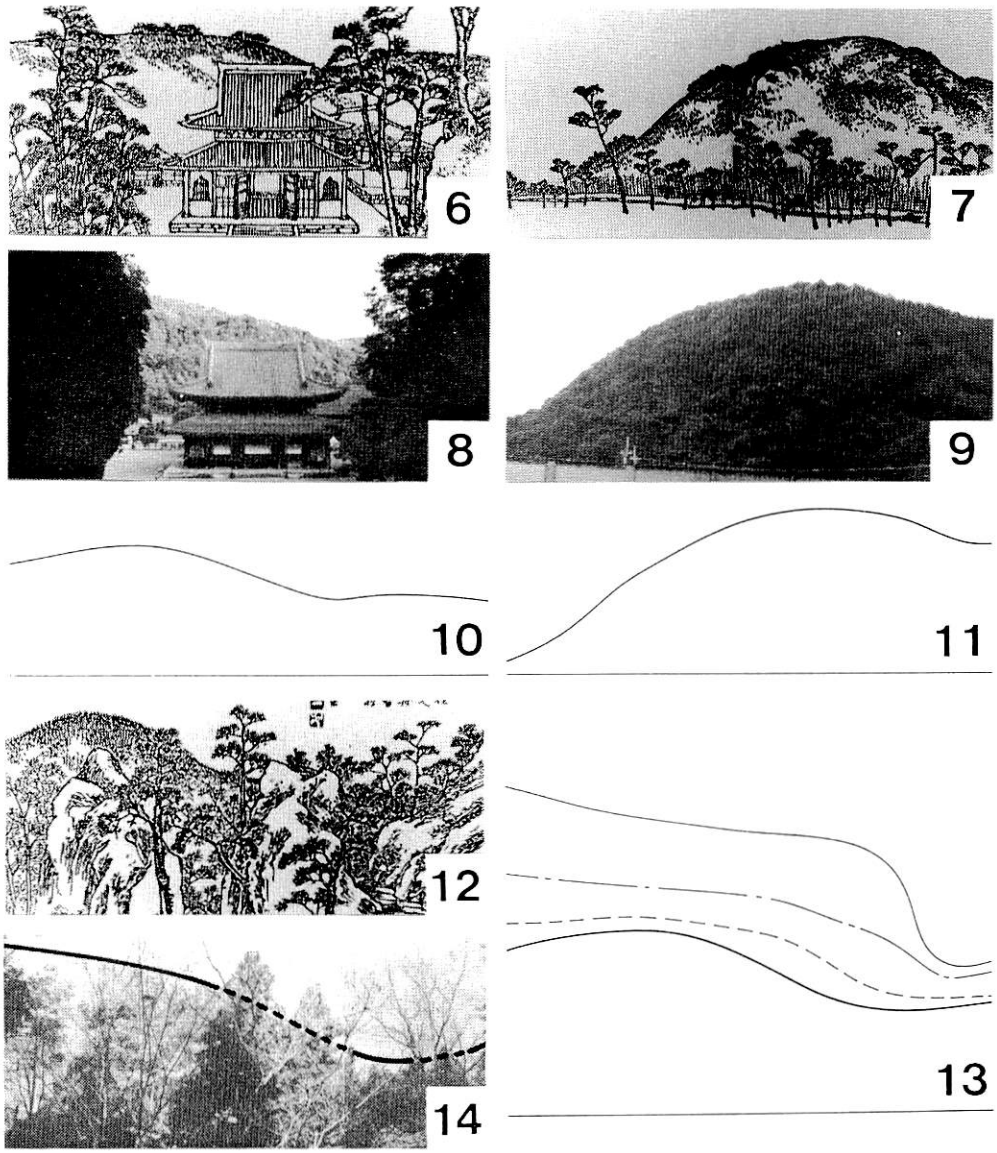


図 6　帝都雅景一覧（泉涌寺）
図 7　帝都雅景一覧（山嘴）
図 8　今日の泉涌寺付近
図 9　今日の山端より見た高野川対岸の山
図 10　地形図から予測される泉涌寺裏山の輪郭（視点は図 6 の視点と考えられるところ，山地の植生高 0m の場合）
図 11　地形図から予測される山端の対岸の山の輪郭（視点は図 7 の視点と考えられるところ，山地の植生高 0m の場合）
図 12　帝都雅景一覧（石門）
図 13　地形図から予測される石門の裏山の輪郭（視点は図 12 の視点と考えられるところ，山地の植生高は下から順に 0m, 5m, 10m, 20m の場合）
図 14　今日の石門付近（実線と点線は裏山の輪郭）

同様であることから，「帝都雅景一覧」で描かれている山地には，実際にそのような孤立林があった可能性が大きいものと考えられる。

ところで，孤立林の周辺の植生高については，樹木が生い茂っている今日では遠方からは決して見えないような岩が図7にはっきりと描かれていることからも，それはかなり低いものであった場合が多いものと考えられるが，そのことは図の視点と山地の距離が近い挿図の考察からもいえることである。図12は京都の北西，釈迦谷山に近い小さな谷の両側にある一対の巨岩を中心に描いたものであるが，その背後の山地の輪郭を形づくる樹木と視点との距離は，樹高によっては50m程度と近い。このような場合，山地の形状は，その植生高によって大きく変わる場合が多い。そこで，地形図をもとにして同一視点から見た山地の輪郭の形状を，植生高が0m, 5m, 10m, 20mの場合に分けて描くと図13のようになる（下から順に0m, 5m, 10m, 20mの場合のもの）。なお，現況は図14のとおりである（黒い実線が山地の輪郭，点線は手前の樹木で隠れている部分）。図12と図13を比較すると，図12の山地の輪郭の形状に最も近いものは，図13の植生高0mの場合の予測輪郭であることがわかる。そして，孤立林は描かれていないものの，何らかの植生が描かれていると見られるその山地の植生は，かなり低いものであった可能性が高い。

このようないくつもの挿図の考察から導かれる結論は，文化年間の頃，京都周辺の山地には，高木の森林のない低い植生の部分が広く見られたこと，そのような中に小さな孤立林が見られた所も多いということである。そして，そのような孤立林は，「花洛名所図会」では，一様によい松林が続いていた東山の中枢部においても見られたようである。なお，ここでは孤立林の樹種の検討は特に行なっていないが，図の描写や「花洛名所図会」の考察などから考えると，アカマツが多かった可能性が高いものと思われる。

3) 「洛外図」からの考察

近世初期を中心に，京都とその周辺の景観や風俗を描いた洛中洛外図は数多く現存するが，その中で「洛外図」は，洛外のみをこと細かに描いている。「洛外図」（中井基次氏蔵）は八曲一双の屏風で，それぞれ約127×480cmの大きさである（図15）。洛外図に描かれた洛外の範囲は広く，左隻では南に山崎や石清水八幡付近，北には雲ケ畑付近，西には栂尾付近までが含まれ，右隻では南に宇治付近，北には大原付近，東には山科東方の山並みまで含まれている。画中には，地名や社寺名などを記した書き入れがたいへん多く見られることから，地図的性格も大きいものと考えられる。「洛外図」の作者や作成年代は定かではないが，それが作成された年代は，後の万福寺の位置に「隠元寺地」との書き入れがあることなどから，隠元が宇治大和田の地を幕府から寄せられた万治2年（1659）から，黄檗山万福寺が正式に開創された寛文元年（1661）頃と考えられる。

「洛外図」の京都周辺山地の植生に関する資料性の考察は，複数の方法によって行った。同時

代の他の文献や絵画の記述や描写との比較検討はその一つである。「洛外図」が作成されたと考えられる頃よりわずかに早く刊行された京の名所案内記である「京童」や「洛陽名所集」（共に明暦4年（1658）刊）には，京の名所とその周辺についての記述や挿図が多くあり，特にそれらの植生に関する記述は，「洛外図」の植生に関する資料性を考える上で重要である。また，「日本林制史資料」からは，「洛外図」完成後間もない頃の上賀茂神社周辺の植生を知ることもできる。そして，

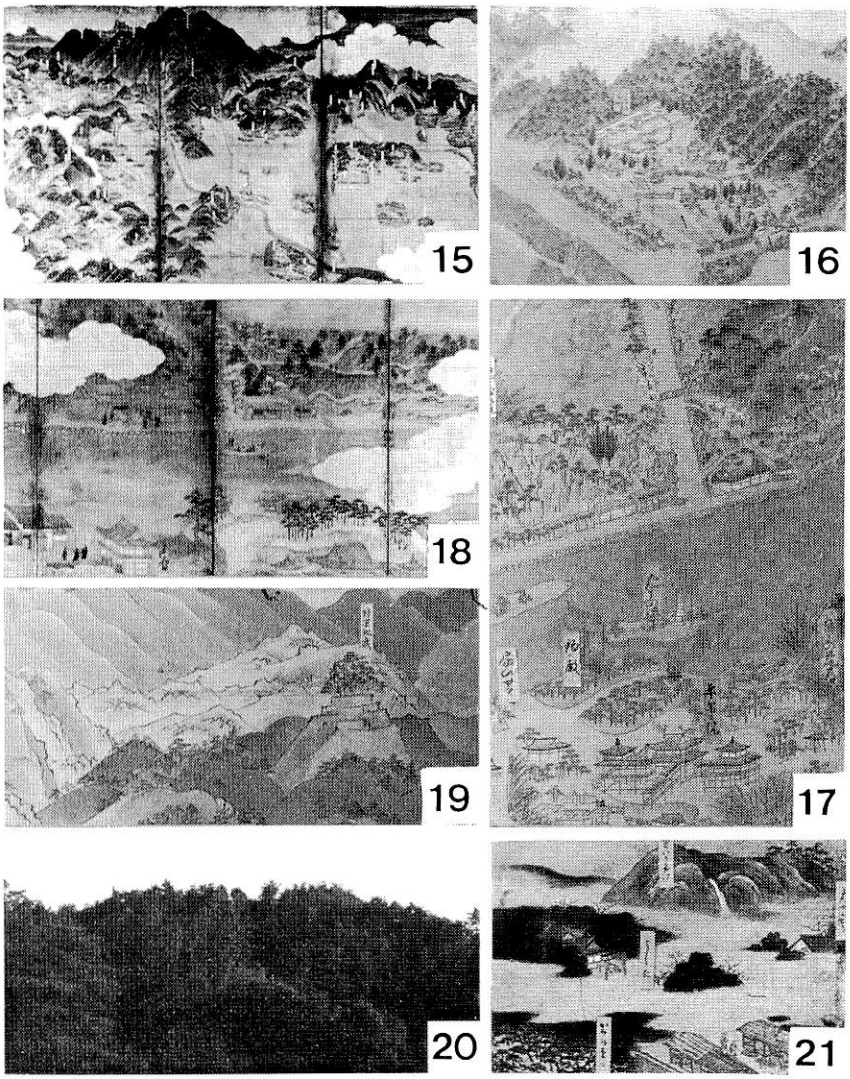


図15　洛外図（京都北東部）
図16　洛外図（上賀茂神社付近）
図17　洛外図（平等院付近）
図18　宇治黄檗図（平等院付近）
図19　洛外図（将軍地蔵付近）
図20　今日の瓜生山
図21　洛中洛外図・町田家旧蔵本（如意ケ嶽付近）

たとえば，当時上賀茂神社周辺には松林が多く，また松の他に杉と檜も保護されていたというその文献の記述が，「洛外図」の上賀茂神社周辺の森林景観の描写(図16)と矛盾しないように，「洛外図」の植生景観に関する描写は，同時代の文献の記述と概して矛盾しないことがわかる。一方，「洛外図」の植生景観の描写（図17）は，「宇治黄檗図」（図18）のように「洛外図」とほぼ同時代の繊細な絵画との比較でも矛盾が少なく，このことからも「洛外図」の植生に関する資料的価値が高い可能性を見ることができる。

ただ，「洛外図」と同時代の文献や絵画との比較は，社寺などの名所を中心としたものであるため，より一般的な京都周辺山地の植生景観については，何らかの別の方法による考察が必要である。「洛外図」の山地の描写をよく見ると，そこには城跡や岩や瀧のように，今日ではその存在がよく知られていないようなものが多く描かれていることがわかる。そのような「洛外図」の山地の特徴的な描写を，京都近郊山地の現況と比較しながら考えることで，その山地の植生景観の描写に関する資料性をある程度考えることができる。すなわち，たとえば，東山連山の北方にある瓜生山には，中世の頃山城があったが，その付近は「洛外図」では将軍地蔵の地として図19のように描かれている。その山の最上部には，多くの木立ちが描かれているが，その下方には植生は全く描かれておらず，かつての城跡と考えられる段状の地形がはっきりと描かれている。また，その背後には，植生がなくごつごつとした山肌も描かれている。一方，今日では，その付近はアカマツやコナラなどの木々ですっかり覆われているため，そのような地形は林内に入りよく観察しない限りわからない(図20)。このように，今日では林内に入らない限り見ることのできない城跡や岩や瀧が，実在する位置にはっきりと描かれ，そのような所が京都周辺の山地に広範に存在していたことは，京都周辺の山地には，当時，植生がないようなハゲ山やかなり低い植生の部分が広く見られた可能性が高いことを示している。

このように，「洛外図」から考えられる江戸初期，万治年間頃の京都近郊山地の植生は，社寺などの周辺には，様々な樹種から成るまとまった森林も多く見られた反面，その他の山地には高木の樹木のない所も多く，草本や低木に覆われていた部分がかなり広がっていたものと考えられる。また，植生のほとんどないハゲ山も結構あった可能性が高い。なお，山地の高木は，ここでも松（おそらくはアカマツ）の割合がかなり大きかったものと考えられる。また，山地の下部には，しばしば竹林も見られた。

### 3. 今後の展望

前章で述べた3種類の絵図の考察からは，近世を通して，かなり類似した京都周辺山地の植生景観が浮かび上がってくる。すなわち，それは今日とは大きく異なり，社寺の裏山などの一部を除けば高木の林は少なく低木類や草本類からなるかなり低い植生の部分が広く見られるような植生景観である。また，所によっては草木のないハゲ山さえも見られたものと考えられる。とはい

え，植生景観は人為や自然災害などにより，急激に変化することもあるため，長い近世の時代の京都近郊山地の植生景観を，わずか3種類の絵図から結論づけることができないことは言うまでもない。様々な視点からの更に多くの研究が望まれるところである。

ところで，近世に見られたような京都近郊山地の植生景観は，いつ頃からあったものなのだろうか。「洛外図」よりも130年余り古いと考えられる町田家旧蔵の洛中洛外図（国立歴史民俗博物館蔵）にも，今日では遠方から見ることのできない瀧が描かれるなど，「洛外図」の描写との類似性がかなりある（図21）ことから，室町時代後期には，近世と同様な植生景観が見られた可能性も大きいが，その時代がどこまでさかのぼるのかも今後の課題である。

さらに，アカマツ林が京都近郊の山地に多く見られるようになったのはいつ頃からであろうか。千葉の文献からの考察によると，その時期は早くとも12世紀末頃と考えられるが，それは花粉分析による考察とは大きく異なるものとなっている。よい資料となるような絵図もないと考えられるそのような時代の考察には，多くの地点での遺跡から出土する植物遺体や炭の分析結果を総合するなどの今後の研究が待たれるところである。ともあれ，このことは，歴史時代の京都周辺山地の植生を考える上で重要な課題の一つである。

なお，ここで特に取り上げた近世の絵図による過去の植生景観の考察の事例は，日本の他の地域の過去の植生景観を考える上でも参考になる場合があるものと考えられる。

## 引　用　文　献

千葉徳爾. 1973. はげ山の文化. 233pp. 学生社.

京都大学埋蔵文化財センター. 1985. 京都大学埋蔵文化財調査報告III. 215pp. 51pls.

深泥池団体研究グループ. 1976. 深泥池の研究（1）. 地球科学. 30：122－140.

中堀謙二. 1978. 京都大学構内遺跡の花粉分析.「京都大学構内遺跡調査研究年報」, 37－39. 京都大学埋蔵文化財センター.

————. 1981. 深泥池の花粉分析.「深泥池の自然と人」, 163－180. 京都市文化観光局.

小椋純一. 1981. 京都周辺林の植生.「都市周辺林整備計画. Ⅷ京都市」, 27－45. 日本緑化センター.

————. 1983. 名所図会に見た江戸後期の京都周辺林. 京都芸術短期大学紀要『瓜生』, no.5：18－40.

————. 1986. 洛中洛外図の時代における京都周辺林. 国立歴史民俗博物館研究報告, 11：81－105.

————. 1988. 近世以降の京都周辺竹林の変遷. 京都精華大学紀要『木野評論』, no.19：25－41.

————. 1989a. 絵画資料の考察からみた文化年間における京都周辺山地の植生. 造園雑誌. 52 (5)：37－42.

————. 1989b. 京都近郊の保護林における植生遷移に関する一考察. 京都精華大学紀要『木野評論』, no.20：122－141.

（1989年5月22日受付）